



高齢化社会への雑感

副 会 長 岡 島 謙 俊

この冬、私どもの道南地方は雪が多く、大変なシーズンであった。地球環境の変化により、温暖化は紛れもなく進んでいると思うが、今年についてはこれが該当しなかった。

お陰様で、毎日のように早朝から自宅玄関前、車庫前、更には、近隣の高齢者宅（自分もその仲間と自覚）の雪かき、スキーから帰ってきたらまたもや雪かきと、散々な日々であった。

さて、少子高齢化という言葉聞いてから、20年以上は経過していると思われるが、私共もまさしく現在その真ただ中に置かれている。

5月5日の新聞報道によると、北海道内の15歳未満の年少人口は58万8千人で、減少数は37年連続であり、年間1万2千人と言われ、過去最低を更新し、歯止めがかからない状況が続いている。さらに道内の人口動向に目を向けると、札幌市への一極集中という現象も表れている。

各自治体の首長も、人口減少に歯止めをかける妙案を出し、取り組まれている事例が報道されている。

しかし、子供の絶対数が減少傾向にあることと、子供達の学校以外での活動が多様化している現在、冬期間に屋外で活動する子供達は、大幅に減少していると思われる。

この現実を、正面からとらえなければならぬと考えている。そのような中、スキー人口の減少に歯止めをかける方法について、いろいろな会議でいつも議題に上がるが、絶対人口が減っていることから、なかなか打開策が打ち出せないでいる。

各自治体でも、スキー授業に取り組んでいる学校はあるが、スキー授業そのもので終わりと

いう子供達が多いのも現状である。

そこで、スノースポーツ指導者の減少（資格の返上）、会員数の減少、高齢化という要因もあるだろうが、仕事を無事終えた（定年退職）仲間が今一番働き盛りと考えるので、生き甲斐を求め、勇気を持ってゲレンデに立つことを考えてみては思っているところです。

昨今、バブル期以降から続いているスキー場の閉鎖という現実もあるが、各スキー団体はいろんな工夫をしながらも、経済圏や都市圏などの広域単位と連携を持って、スノースポーツ事業や指導を行う事も必要と考える。既にこのような取り組みを行っている団体もみられるが、これからは規定概念に捉われず、底辺拡大と組織維持を念頭において進んでいかなければならない。ここで活躍している多くは、団塊世代を中心とした方々であり、自分達のお孫さん年齢の子供達を指導して頑張っている。

年齢が増してから体力を伸ばそうとすると、所詮体に無理がかかる。体力を伸ばさなくても維持するくらいの考えで、一年を通して体を動かし、シーズンに備えて子供達と接し、時には若い指導者の仲間と技術・指導研修も行いながら生き甲斐を求めていく事が大切と考える。

当会の顧問である坂口一弘氏は、ゲレンデ、山スキーはもとより、クロカン、登山にジョギング、一人歩き旅と多種多様な運動の趣味を持ち、鉄人・超人的存在で、私は足元にも及ばないが、少しでも見習い努力しようと思っている。

昨今は、中国・韓国を含め海外のスキーヤーの指導に携わっている仲間も多くいるが、スキー技術もさることながら語学を身につけることも生き甲斐と考えるのは如何でしょうか！